

## 二つの政治形態

現在、民主政治が理想の政治形態だというのが私たちの常識になっているようだ。しかし、果たして民主政治が理想の政治形態であろうか。民主政治の対極にある政治形態として中国における天命による政治形態があり、これもなかなか捨て難い政治形態である。何故捨て難いのか、それをこれから少し考えてみたい。

### 1、民主政治

民主主義国家であるかどうかの基準は、いろいろあると思うけれど、私は、フランク・フクヤマの次の基準が良いと思う。イ、相対立する複数立候補者が存在する、自由で、無記名で、定期的な男女普通選挙の実施。ロ、普通選挙によって構成された議会が立法権の最高権限を持っていることの憲法などの公式文書での明文化。ハ、議会内における相互批判的な複数政党の存在。ニ、自由で多様な行政府批判を行う国内大手メディアが存在し、それを不特定多数が閲覧できること。

世界には多様な民主国家が存在しているが、これらはおおむね共通して存在する基準である。したがって、日本は間違いなく、この基準を満足しているので、民主主義国家である。一方、プラトンの考えによると、「民主主義の成功のためには、国民の有権者全体が知的教育を受けられること、恐怖や怒りなどの感情、個人的な利害、マスコミによる情報操作や扇動などに惑わされず理性的な意思の決定ができる社会が不可欠である。つまり徳を持つことである。逆の言い方をすれば、民主主義を無条件に広めると、知的教育を受けていないもの、恐怖や怒りなどの個人の感情や利害損得に影響されやすい非理性的なものも有権者（政治家と選挙民）となり、結果として衆愚政治となりかねない危険がある」ということになってしまいかねない。この点からすれば、おおよそ世界の民主主義国家と考えられている国家は、すべて衆愚政治に陥っていることになる。したがって、現在の民主主義において、プラトンの哲人政治というか強い政治を望む声も出てくるようなことになる。マスコミ亡国論などというものも衆愚政治を忌避するところからでてくる。

現代の民主主義・民主制・民主政は、古代ギリシアにその起源を見ることができる。デモクラシーの語源は古典ギリシア語の「デモクラティア」で、都市国家（ポリス）では民会による民主政が行われた。特にアテナイは直接民主制の確立と言われている。またヘロドトスの『歴史』では更に寡頭制と専制を加えた三分類が登場し、プラトンやアリストテレスが貴族支配や君主支配の概念とともに整理した。ただし古代アテネなどの民主政は、各ポリスに限定された「自由市民」にのみ参政権を認め、ポリスのため戦う従軍の義務と表裏一体のものであった。女性や奴隷は自由市民とは認められず、ギリシア人の男性でも他のポリスからの移住者やその子孫には市民権が与えられることはほとんど無かった。しかし、後に扇動的な政治家の議論に大衆が流され、政治が混乱しソクラテスが処刑されると、プラトン・アリストテレス・アリストパネスなどの知識人は民主政を「衆愚

政治」と批判し、プラトンは「哲人政治」を主張した。後にアテネを含む古代ギリシアが衰退して古代ローマの覇権となると、大衆には国家を統治する能力は無いと考える時代が長く続いた。

塩野七生など学識経験者で、今の政治に対し、哲人政治とまではいわなくても、強い政治を望む声が少なくないのも事実だと思うが、そういう人の考えには、プラトンなど古代ギリシアの知識人の考えが、潜在的に影響しているのではないか。かかる観点から、哲人政治を理想とするプラトンの考えに照らして、中国における天命思想にもとづく政治形態は大変魅力のある政治形態であるように見える。

## 2、天命思想にもとづく政治形態

白川静は、その著「孔子伝」（昭和47年11月、中公叢書）の第2章「儒の源流」の中で「天の思想」について書いている。その要点は次の通りである。すなわち、

『 天は自らその意志を示すことはないが、天意は民意を媒介として表現される。為政者が天の徳を修めていれば、民意の支持を受けることができる。天意はそれによって動く。ここには人民が、天意の媒介者として意識されている。政治の対象として、民衆の存在が自覚されてきたのである。このような政治思想は、天の思想と呼ばれる。殷周革命を契機として、天の思想が成立した。』

『 天意が民意によって媒介されるとすれば、それは絶対にして神聖なる王権ではない。受命によって生まれた王権は、また革命によって失われる危険を常に包蔵する。天の思想はまた革命の思想である。』

『 天の思想は、古代的な宗教と政治を切り離した。そしてそこに合理的な精神を導入したが、天意が民意を媒介として表現されるのは、人間の存在の根拠が、その徳性のうちにあるとする自覚にもとづいている。』

『天の思想とその展開を辿ってゆくと、初期の儒家の政治思想や道德思想が、ほとんどすでに西周の後期において、ほぼ体系づけられていることが知られよう。』

『 周初に起った天の思想は、西周後期の危機意識の中で深められていった。しかしその思想を記した「書」や「詩」が、故事の伝承者である史や楽師によって伝えられたために、思想として発展する機会を持ち得なかったことはやむを得ない。彼らは本来、神秘主義者であるからである。史・師ばかりでなく、その学を承けた孔子においても、天の思想は十分な展開をみせなかった。民人を媒介として天意が示されるという、政治思想としての天の理解は、孟子によって回復され、その民本思想の根拠となった。』

『 孔子も、しばしば天を称している。（中略）徳の根源を天にもとづけて言うこともあるが、これを政治思想として組織することはなかった。そこに巫史の学から出た孔子の思想家としての限界があった。』・・・と。

それでは、政治思想としての天命思想について、孟子の思想を勉強しておきたい。

書経（しょきょう）は、政治史・政教を記した中国最古の歴史書。堯舜から夏・殷・周の帝王の言行録を整理した演説集である。その原型は周初の史官の記録にあると考えられている。儒教では孔子が編纂したとし、重要な経典である五経のひとつに挙げられている。古くは「書」とのみ、漢代以降は「尚書」と呼ばれた。「書経」の名が一般化するのには宋代以降である。

その「書経」について、金谷治はその著「孟子」（1966年6月、岩波書店）で次のように説明している。すなわち、

『 五経の一つのである「書経」の内容の中心部は、殷を倒した周王朝がその革命の正当性を強調した記録である。そこでは、殷王朝の徳が衰えたために新たに周が天命をうけることになったと説く。（中略）周王朝の成立、それはおおよそ西暦前12世紀のことと考えられているが、そんな古い頃に、政治は民衆のためにあるべきもので、それをなおざりにすると革命の危険があるという思想が、すでに確立していたのである。』

『 「書経」の中にみられる周初の政治思想を継承して、それを一層はっきりした形で強調したのが、孟子であった。儒教のこの重要な一面が、こののちにも健康な伝統としていき続けたのは、孟子の力によるところが大きかったとしてよかろう。』・・・と。

そして、金谷治はその著「孟子」のなかで、天命思想という政治思想について、次のように説明している。すなわち、

『 門人の万章が、有名な堯から舜への譲位の伝説を取り上げて質問した時のことである。孟子は、天子とても、かつてな個人の意志で天下を他人に譲ることはできないと述べて、それを「天のしわざ」であるとした。「天のしわざ」とは何であろうか。孟子はその問いを待って、おおむね次のように答えた。「天命と言っても、別に天がものを言う訳ではない。それは人間世界の行事において示される。むかし堯は舜に国家の祭祀を代行させたところ百神に祟りがなく、政務を代行させたところ万事がうまく治まって、人びとも安らかであった。これは、天に推薦して天が承認し、民衆にあらわして民衆が承認したことである。」

『 天命思想という政治思想は、「天子の地位を保証する天意は、民衆の意思によって代表される」という思想である。』・・・と。

『 天命思想という政治思想は、けっして民主的な思想ではない。（中略）孟子の政治哲学はもとより統治者のために考えられたものである。民衆の立場に身を置いて、民衆に向かって説いたものではない。彼の念願は、混乱した世界を新しい道徳的な政治理念で秩序づけることであって、民衆の勃興をそのままどこまでも肯定することではなかった。（中略）孟子の天命思想は、民衆のための政治ではあっても、民衆の権利を正当に認める近代的なデモクラシーの思想では、ついになかった。』

『 道徳とは縁遠い教養を持たない民衆が、いつも被治者として、そして租税を納める義

務を持つ者として枠づけられているという事実は、重要である。それは、封建体制の維持にとっては、きわめて好都合な思想であった。「孟子」という書物が、国教となった儒教の重要な典籍となったのには、やはりそれだけの理由があったのだ。』

以上、孟子の天命思想についての金谷治の説明を紹介したが、どうも金谷治は民主政治を理想の政治形態だと考えているようである。しかし、中国のような民主主義の歴史のまったくない国において、そもそも民主政治が良いのかどうかについては、よくよく吟味しなければならない。つまり、金谷治は「孟子の天命思想は、民衆のための政治ではあっても、民衆の権利を正当に認める近代的なデモクラシーの思想では、ついになかった。」と言うが、それはその通りだとしても、問題は、中国のような国ではたしてデモクラシーの思想で統治していくのが良いのかどうかという問題であるし、さらに金谷治は「孟子の天命思想は、封建体制の維持にとっては、きわめて好都合な思想であった。」と言うが、中国がこれから近代化を進めていく上で、孟子の天命思想がいちばんふさわしいのかどうかという問題である。この問題は、中国を統治していく上での根本的な問題であって、孟子の天命思想の対極にあるデモクラシーの思想で良いのかどうかという問題である。私は、中国のような5000年の歴史によって成り立っている国においては、やはりその歴史を重んじて、この際、孟子の天命思想に立ち返ることができるかどうか、それが中国の為政者に問われているのだと思う。それを以下において、考えてみたい。